

2011年3月20日 山形本町教会復活前第5（受難節第2）主日礼拝 説教

「用いられて、新しくなる」（マタイ⑩）

聖書 サムエル記上 10章1～13節

マタイによる福音書 4章18～22節

讃美歌 307、298、529、516、29（アーメン）

交読詩編 19・1～15 96・1～13b

石井佑二

◆サバイバーズギルト。3月11日を経て、日常を生きる私たちに課せられる課題。

3月11日の東日本大震災を経て、私たちは日常生活を送るにおいて、様々な事柄に気付かされ、心を配った日々を送っています。今もなお避難生活を強いられる方々が多数おられ、厳しい思いを強いられる方がおられます。私たちは真に、この時祈りを合わせ、できることを誠実に果たしていきたいと思います。この時に私たちはそのことと同時に心しなければならぬことが多くあります。その一つに精神医療の分野において「サバイバーズギルト」という言葉があります。それは直訳すれば「生き残った者の罪悪感」ということです。7千人近くの人々が亡くなり、何十万人という人々が今苦しんでいる。その現実の中で、私は比較的被害を受けずに生活できている。しかし思うような支援をあなたたちになすことができないでいる。その様に思い、無事に生きていることそのものに罪悪感持つてしまうのです。そしてその罪悪感は、深刻な場合、精神に何らかの障害を残してしまうこともあり得るのです。ある精神科医は、そのような深刻な状況を避けるために大切なことは、その様に罪悪感を持つてしまうことは、客観的心理学的に見て、絶対に避けられないことなんだ、と知ることだ、と言います。そして過度にその罪悪感の中に自分を留めてしまうのではなく、逆にその罪悪感を力に変えて、生き残っていることの意味を肯定的に捉えて、その状況から、今苦しんでいる人たちに自分のできることを少しずつでもなすのが大切だ、と言うのです。

私たちは現状のままではだめだ、と簡単に思ってしまうがちです。現状を否定して、何か新しい事柄を始めなければだめだ、と思ってしまうます。新しいことをする、という思いには賛成です。しかしそれを今あるものを否定して、という形で始めてはならないのです。それは聖書の考えと異なるのです。ではどういう形で新しいことを始めるべきだと聖書は言うのでしょうか。どういう形で「生き残った者の罪悪感」を乗り越えて、今苦しんでいる人たちに支援の手を差し伸べることができるのでしょうか。

◆マタイ4・18～22：「網を捨てて従った」ペトロ。しかしそれを用いる主イエス。

マタイによる福音書4章18節以下をお読みいただきました。ここには主イエスと出会った四人の漁師が、主イエスの招きを受けて弟子となる、ということが描かれています。特に今日はペトロと主イエスの出会いに注目したいと思います。ペトロはこの時漁師とい

う職業を持っていました。しかしペトロとその兄弟は、主イエスの招きを受けて20節「**人はすぐに網を捨てて従った**」と書いてあります。漁師という職業を捨てて、新しい道、主イエスの弟子として生きる、その御心をこの世において達成する者として新しい生き方を始めるのです。私たちはこの記事を読んで、早合点してしまい、「何だ、やっぱり新しいことを始めるには今あるものを捨てなくては、否定しなくては駄目だと聖書も言っているではないか」と捉えてしまうかもしれません。しかしそうではありません。大切なことは、主イエスは何と言ってペトロを弟子として招いているか、ということであります。それは19節「**わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう**」という招きです。聖書はその前の18節の最後で「**彼らは漁師だった**」とわざわざ語っています。主イエスはそれを承知の上で、「**人間をとる漁師にしよう**」とお語りになっておられるのであります。それは主イエスがペトロのこれまでの人生の歩み、漁師として歩んできた彼の人生を肯定しながら、それを用いて、あなたに出来ることを示そう、という形で、弟子として新しくすべきことを示してくださっているのであります。ペトロは主イエスの招きからそのことが分かったのです。だから捨てたのです。古い生き方としての漁師の歩みの人生を、主に献げたのです。この人生を用いて、新しい生き方に変えて下さると信じて、その網を献げたのです。

ここに私たちの新しい生き方が示されているのではないのでしょうか。それは自分の現状、自分が生きていること、これまで生きてきたことを否定することで生まれるものではないのです。そうではなく、主イエスが私の人生を認め、受け止めて下さる。肯定して下さる。このことの確信から、新しい生き方は生まれるのです。それは主が、私の在り様を用いて下さる、という確信です。生きている、いや、この命は意味を持って生かされている。主に献げするために、そして主に用いていただくためにある。そのことに気付きたい。自らの否定から新しい命が生まれるのではない。またいたずらな自分の現状の肯定によって新しさが生まれるのでもない。主が、私の命を肯定して下さっているという確信が、主によって用いられるものとして自らの命を新しくするのです。新しい何かを生み出す力を生み出すのです。

今、福島原子力発電所が大変なことになっています。この東北の地が悲惨な状況になるかどうかの瀬戸際です。しかしその様な悲劇を食い止めるために、自らが被爆することを覚悟で働いている人達があります。それは私たちの今ある命を守り、そして明日を、将来を私たちに迎えさせるための働きです。原発に関わっている人々を非難する声があります。しかしそうであってはならないはずで、なぜなら今あるこの命は、その様に懸命に働いてくれている方々によって守られている命だからです。ここに主イエスのお働きの指示しを見ようではありませんか。私たちの命は、大いなる罪の身代わりの犠牲によって、際どい所を守られた命なのです。どうしてその命を否定などできるのでしょうか。主は、この命を主の御心のために生かせ、そして苦しむ人を支援しなさい、あなたならそれが出来る、と言って下さっています。こうして今の自分を肯定しながら出来ることをなす。それが主の弟子たる私たちの命の使い方、いや、主による私たちの命の用いられ方なのであります。